

能登半島地震 緊急論考

「命を守る呼びかけ」「災害関連死」

～過去の災害の教訓は生かされたのか～

メディア研究部 中丸憲一 / 世論調査部 中山準之助

「いますぐ逃げること」。2024年元日の夕刻に発生した能登半島地震で、東日本大震災以来となる大津波警報が発表され、NHKの放送では、アナウンサーが強い口調で避難を呼びかけた。本稿では、この呼びかけを含めた初動対応を5つのフェーズに分けて詳細に分析した。語尾を「〇〇すること」とする呼びかけを「念押しのことば」として定義するとともに、東日本大震災を教訓にNHKが作成した「命を守る呼びかけ」が、放送の歴史上、大津波警報発表下で初めて本格運用されたことを論証した。一方で、「日本海側で起きる津波の到達は早い」という情報については、必ずしも十分に伝えきれなかったという課題も提起した。

また、「災害関連死」を防ぐための課題についても、▶2016年の熊本地震以降に注目された避難所運営の国際基準や、▶100年前の関東大震災以来、重要視されてきた「広域避難」を例に分析。今回の能登半島地震で過去の教訓が十分に生かされなかったことを指摘し、今後の災害時に求められるメディアの役割を検討した。

はじめに

コロナ禍明けの元日を襲った大地震

2024年1月1日の午後4時10分ごろ、石川県能登地方を震源とするマグニチュード（以下、原則「M」と表記）7.6の大地震が発生した。石川県志賀町^{し か まち}で震度7の激しい揺れを観測し（輪島市でも震度7を観測していたことが同月25日に判明¹⁾）、鉄筋コンクリートのビルを含む多くの建物が倒壊したほか、火災も起きた（画像1）。また、土砂災害も多発し、土砂が道路を塞ぐなどして山間部を中心に孤立する集落が相次いだ。さらに、津波防災の専門家によると、最短1分という短時間で津波が能登地方の沿岸に到達したとみられ²⁾、犠牲になった人もいた。

この地震や津波により死亡が確認された人は、石川県内で241人となっている（3月1日午後2時時点、石川県調べ³⁾）。特に新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザなどと同じ「5類」に移行した⁴⁾、いわば「コロナ禍明け後」に初めて迎えた元日に起きた大地震

画像1 能登半島地震の被害



NHK 総合テレビ、1月2日午前7時6分

だったため、久しぶりに帰省した人たちの中にも犠牲になった人がいた。さらに過酷な避難生活などが原因で亡くなる、「災害関連死」⁵⁾（「解説①」参照）の疑いのある人はこのうち15人で⁶⁾、被災者の避難生活での健康管理などが大きな課題になっている。気象庁はこの地震を「令和6年能登半島地震」と命名した（以下、能登半島地震と表記）。

解説①

災害関連死

内閣府によると、「災害関連死」は地震の揺れや津波などによる直接的な被害ではなく、その後の避難生活などで病気が悪化したり体調を崩したりして、命が失われるケースを指す。長期間にわたる体育館等での集団での雑魚寝や車中泊など、避難生活の環境の悪化が心身の不調や負担となり、2016年の熊本地震では、「災害関連死」と認定された人が、建物の倒壊など地震の直接の影響で亡くなった人の4倍以上に達し、大きな課題になった。

能登半島地震では発生直後に津波警報、その後、大津波警報が発表され、放送メディア各社は緊急報道を展開し、一刻も早い避難を呼びかけた。大津波警報の発表は、2011年の東日本大震災以来となる。このうちNHKは、アナウンサーが強い口調で避難を呼びかける「命を守る呼びかけ」を、大津波警報が発表されている状況で初めて本格運用した。具体的には以下のことばで行われた。

- 「みなさんの命を守るため、いますぐ可能な限り高いところへ逃げること」
- 「決して立ち止まったり引き返したりしないこと」
- 「いますぐ家を離れて逃げてください。大切な家財、大切なお家、あるかと思いますが、

みなさんの命が何より重要です」

- 「あきらめないで逃げてください」

アナウンサーが避難の呼びかけに用いた、こうしたさまざまな表現について、本稿では2章で「念押しのことば」として詳述する。

また、その後の過酷な避難生活による被災者の健康悪化や災害関連死の課題は、1995年の阪神・淡路大震災や、2004年の新潟県中越地震、2011年の東日本大震災、そして2016年の熊本地震など、これまでの大地震でたびたび指摘されてきた。

本稿では、「命を守る呼びかけ」や「避難生活の課題」など、過去の災害を教訓にこれまで行われてきた対策を、メディアや自治体などが生かされたのかについて、NHKの発災当日の放送などを中心に分析する。このうち、主に1章「能登半島地震の概要とこれまでの地震活動」と3章「災害関連死の危険 過去の教訓は生かされたのか」は、報道局社会部や地方局で災害担当の記者やデスクを約20年務め、災害時の呼びかけの検討にも関わった中丸が執筆した。また、2章「大津波警報での『命を守る呼びかけ』初の本格運用」は、東日本大震災当時、被災地・盛岡放送局のアナウンサーで、「命を守る呼びかけ」の検討にも2011年夏から関わった中山が主に執筆した。なお、こうした緊急報道の検証の際には、当日、対応にあたったアナウンサーへの聞き取りを行う場合がある⁷⁾。ただ、本稿執筆時点で「担当アナウンサーの大地震への緊急対応が続いている」などの理由があり、今回は聞き取りを行わずに論を進めた。このため、当日の放送の録画などの記録をもとに、筆者2人のこれまでの経験をふまえながら分析・考察した。

1章 能登半島地震の概要と これまでの地震活動

1-1 能登半島地震の概要

まずは、今回の大地震の概要をみていきたい。

地震が発生したのは、2024年1月1日午後4時10分で、震源地は石川県能登地方、震源の深さは16キロで、地震の規模を示すマグニチュードは7.6と推定されている⁸⁾。阪神・淡路大震災と熊本地震⁹⁾は、いずれもM7.3だったので、これを上回る規模だ。

この大地震により津波が発生。石川県の輪島港で1メートル20センチ以上、金沢港で90センチの津波を観測するなど、北海道から九州にかけての日本海側で津波を観測した¹⁰⁾。また、その後、気象庁が行った現地調査で、▶新潟県上越市で5.8メートル、▶石川県能登町で4.7メートル、▶石川県珠洲市^{すず}で4.3メートルの高さまで津波が陸地を駆け上がったと推定された¹¹⁾。

1-2 能登半島の最近の地震活動

今回地震が発生した石川県能登地方では、2018年ごろから地震の回数が増加し、2020年12月から地震活動が活発化。2021年7月ごろからはさらに活発になっていた。特に2023年5月5日午後2時42分には、M6.5の地震が発生し、石川県珠洲市で震度6強を観測した。能登半島地震の震源のおおむね北東に位置している¹²⁾ (図1)。

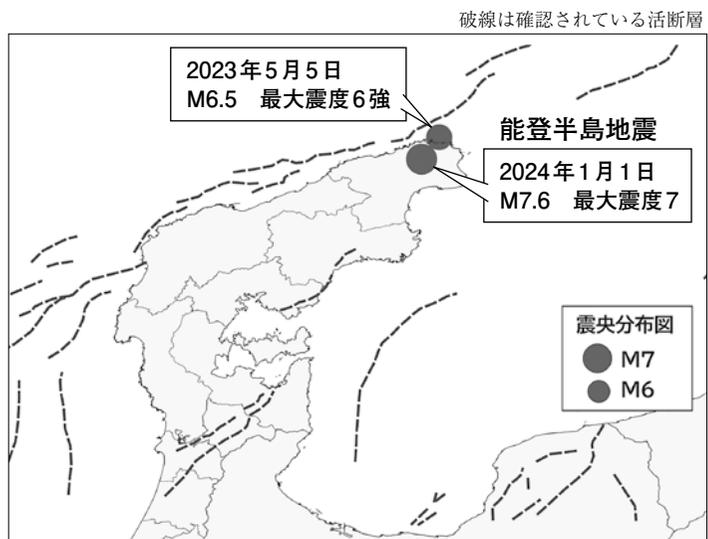
この一連の地震活動について

政府の地震調査委員会は、2023年5月12日に発表した「石川県能登地方の地震活動の評価」¹³⁾の中で、▶能登半島の北岸沖の海底には、活断層が存在することが知られていること(図1の破線)、▶一連の活動には、(地下にある水などの)流体の移動が関与している可能性があること¹⁴⁾、▶今後、海底で規模の大きな地震が発生した場合、津波に注意する必要があること、などを指摘していた。

1-3 あまりにも早かった津波到達 ～日本海側の特徴～

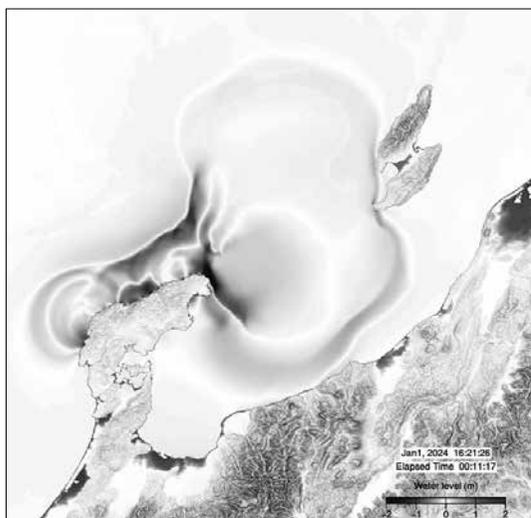
「はじめに」で記述したとおり、能登半島地震では、大きな津波が能登地方などの沿岸を襲った。今回は津波の高さとともに、到達の早さも特徴的だった。東北大学災害科学国際研究所の今村文彦教授(津波工学)の研究グループが行ったシミュレーションでは、▶石川県

図1 2023年5月の地震と2024年能登半島地震の震源



震源は気象庁資料*1、活断層の位置は産業技術総合研究所の資料*2(地震調査委員会「令和6年能登半島地震の評価」(2024年1月2日)、p32)を参照し作成
*1: https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/daily_map/index.html
*2: https://www.static.jishin.go.jp/resource/monthly/2024/20240101_noto_1.pdf

画像2 能登半島地震津波シミュレーション



画像提供：東北大学災害科学国際研究所 今村文彦教授

珠洲市にはおおむね1分以内、▶石川県七尾市には2分以内、▶富山市には5分以内、▶新潟県上越市には12分以内、で沿岸に到達していたと推定されている¹⁵⁾ (画像2)。これについて、今村教授は筆者の取材に対し、「日本海側で発生する津波は陸の近くで起きることが多く、到達時間がものすごく早いのが特徴だ」と話している¹⁶⁾。前年の2023年に、発生からちょうど40年となった1983年の「日本海中部地震」では、地震が起きてから青森県の沿岸に最短約8分で津波が到達した¹⁷⁾。また、発生から30年となった1993年の「北海道南西沖地震」では北海道の奥尻島に地震発生から3分後に津波が到達した¹⁸⁾。いずれの地震でも津波警報が間に合わず多くの犠牲者が出たため、気象庁は津波予報の迅速化を推進した。1994年8月から「地震発生から約3分」を目標に津波予報を発表することが可能になった¹⁹⁾。しかし、今回の津波は最短でおおむね1分以内に到達したとみられ、今村教授は「残念ながら今回も津波警報は第1波の到達に間に合わなかつ

たと考えられる」と話している。

“日本海側で起きる津波の到達は非常に早い”という教訓を今回の能登半島地震で改めて見つめ直し、同じ日本海側の地域の住民への啓発を行うなどの対策を検討すべきである。具体的には「大きな揺れが来たらずぐに逃げる」「事前に避難場所を確認しておくことや、非常持ち出し品の準備をしておくこと」などである。

地震発生から数分以内に到達する津波から命を守るには、これを徹底することが最も重要であると筆者は考える。

1-4 地震発生以降の情報の時系列

次に、大地震の発生当日に、地震や津波の情報がどのように出たのかを、NHKの放送をもとに、地震発生から約1時間半後までを対象として時系列でみていく。なお、詳細は後述するが、最初の地震が起きた午後4時6分から約1時間半の間に、「対象範囲拡大」も含め、緊急地震速報が10回発表されるなど、大きな揺れを伴う地震が次々に発生した。このため、震源やマグニチュードがわかっているものについては、図と表で示すとともに、それぞれ「地震A」などと、アルファベットで区分した(表1, 図2)。地震発生前、NHK総合では「サッカー日本代表強化試合 日本対タイ」の試合を生中継していた。日本が勝利し、森保一監督のインタビュー開始直後の4時6分に最初の緊急地震速報(表1の緊急地震速報①)のチャイム音流れ、「石川県で地震 強い揺れに警戒」と自動スーパーと自動音声による警戒が呼びかけられた。そして東京のスタジオから特設ニュースが始まった。

午後4時7分、震度速報が入り、「震度5強 石川県能登地方 震度3 新潟上越地方 新潟

表1 情報発表の時系列

放送時刻	情報	内容
1日午後4時6分 7分 8分	緊急地震速報① 震度速報	▶「石川県で地震 強い揺れに警戒」 ▶震度5強 石川県能登地方 震度3 新潟上越地方 新潟中越地方 富山東部 富山西部 ▶「津波の心配なし」※16時6分に起きたM5.5の地震による（地震A）
午後4時10分 11分 12分 13分 16～18分	緊急地震速報② 緊急地震速報③ (対象範囲拡大) 緊急地震速報④ (対象範囲再拡大) 震度速報 津波警報発表 震度速報・市町村震度	▶地震B発生 ▶「緊急地震速報 石川県で地震」 ▶「緊急地震速報 石川県で地震 石川 富山 新潟 長野 岐阜 群馬」 ▶「緊急地震速報 能登半島沖で地震 北陸 新潟 甲信 東北 関東 東海 近畿」 ※対象範囲拡大は「PLUM法」などによる ▶震度6強 能登地方 震度6弱 新潟中越地方 ▶新潟県上中下越 佐渡 富山県 石川県能登 石川県加賀 予想高さ3m ▶石川県能登地方（志賀町）震度7
18分	緊急地震速報⑤	対象地域は石川と富山 ※16時18分に起きたM6.1の地震による（地震C）
22分	大津波警報	▶石川県能登に大津波警報（予想高さ5m） ▶津波警報が山形県、福井県、兵庫県北部に発表 津波注意報の範囲も北海道から九州にかけての日本海沿岸に拡大 ※大津波警報の発表、津波警報・注意報の拡大は、地震Bのモーメントマグニチュード7.6（「解説③」参照）の判明による
29分 35分 39分 40分 41分 57分	津波観測 緊急地震速報⑥ 津波観測 緊急地震速報⑦	▶石川県輪島市で1m20cm、富山市で50cm ▶輪島市の津波「1m20cm以上」に更新 ▶富山市で80cm ▶「能登半島沖で地震 強い揺れに警戒 石川」 ▶新潟県柏崎市で40cm ▶「能登半島沖で強い地震 強い揺れに警戒 石川」 ※16時56分に起きたM5.8の地震（地震D）
午後5時3分 7分 22分	緊急地震速報⑧ 緊急地震速報⑨ 緊急地震速報⑩	▶「石川県で地震 強い揺れに警戒 石川」 ▶「石川県で地震 強い揺れに警戒 石川」 ▶「石川県で地震 強い揺れに警戒 石川」

中越地方 富山東部 富山西部」とアナウンサーのコメントと速報スーパーで伝えられた。気象庁によると、これは直前の4時6分に起きたM5.5の地震（図2の**地震A**）のデータで、2分後の4時8分には「この地震による津波の心配はありません」という情報が続いた。

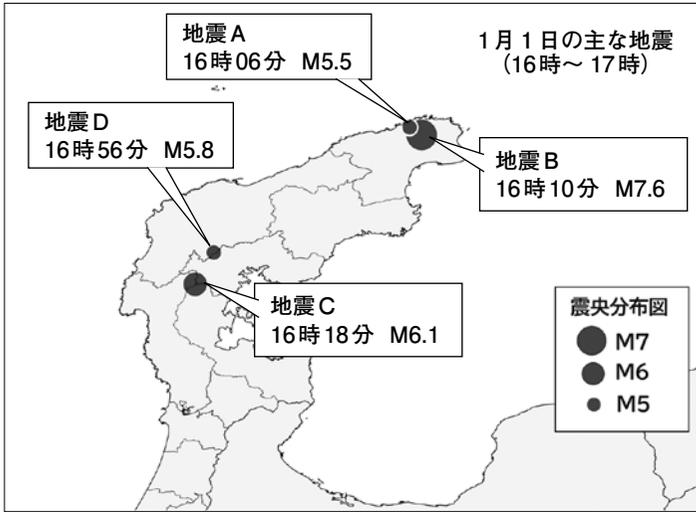
ところが、この情報を伝えている最中の午後4時10分に、規模にして地震Aの約1,400倍にあたるM7.6の地震（図2の**地震B**）が起きた。この地震の発生を伝える緊急地震速報（表1の緊急地震速報②）の画面には、「緊急地震

速報 石川県で地震」という内容が自動的に映し出されていた。

さらに緊急地震速報（表1の緊急地震速報③）が発表。内容は「緊急地震速報 石川県で地震 石川 富山 新潟 長野 岐阜 群馬」で、強い揺れが予想される範囲が拡大した。

そして午後4時11分には「緊急地震速報 能登半島沖で地震 北陸 新潟 甲信 東北 関東 東海 近畿」と、たて続けに情報が更新され、対象範囲がさらに拡大した（表1の緊急地震速報④・画像3）。

図2 能登半島地震の主な震源分布



気象庁資料*を参照し作成
* : https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/daily_map/index.html

画像3 緊急地震速報の対象範囲拡大



NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時11分

解説②

PLUM法

東日本大震災で、震源から遠く離れた関東地方でも強い揺れが観測されたにもかかわらず、緊急地震速報を適切に発表できなかったことなどを教訓に、2018年3月に運用が開始された緊急地震速報の新しい手法。

従来手法のように、震源や規模の推定は行わず、地震計で観測された揺れの強さから直接震度を予想する。

「予想地点の付近の地震計で強い揺れが観測されたら、その予想地点でも同じように強く揺れる」という考えに従った予想手法で、広い震源域を持つ巨大地震であっても精度よく震度を予想することができる²²⁾。

※「PLUM」は、Propagation of Local Undamped Motion の略。

緊急地震速報②③④は、いずれも午後4時10分に起きた地震(地震B)によるものだ。また、筆者が気象庁に取材したところ²⁰⁾、対象範囲が拡大された理由の1つが、東日本大震災を教訓に導入された「PLUM(プラム)法」という予測手法が使われたということだった²¹⁾(「解説②」参照)。その後、4時12分、「震度6強 能登地方 震度6弱 新潟中越地方」という震度速報が入る。

午後4時13分、「新潟県上中下越 佐渡 富山県 石川県能登 石川

県加賀」に津波警報が発表されたことが伝えられた。予想される高さはいずれも3メートルで、津波到達予想時刻は、石川県加賀以外はいずれも「到達か」となっていた(画像4)。1-3で述べたとおり、日本海側の津波到達が早いという特徴を示している。

画像4 津波警報発表

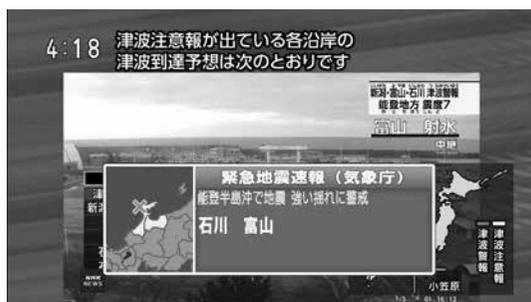


NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時13分

午後4時16分、震度速報が入ったとみられ、画面右上の字幕で「能登地方震度7」という表示が出た。4時18分にはアナウンサーが石川県志賀町で震度7を観測したことを伝えた。その直後(18分)、緊急地震速報(表1の緊

急地震速報⑤)が発表され、対象地域が「石川と富山」であることを伝えた(画像5)。気象庁によると、これは午後4時18分に、これまでの地震の震源よりも南西側で起きたM6.1の地震によるものとみられる(図2の地震C)。

画像5 震度7表示



NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時18分

そして、午後4時22分、大津波警報が「石川県能登」に発表されたことが伝えられた(画像6)。「石川県能登」は、当初、津波警報だったため、大津波警報に引き上げられたことになる。「はじめに」でも触れたが、大津波警報の発表は、2011年の東日本大震災以来だ。あわせて、早いところでは到達とみられますとアナウンスし、予想される高さは5メートルであることも伝えた。また、津波警報が山形県、福井県、兵庫県北部にも出されたほか、津波注意報の範囲も北海道から九州にかけての日本海

画像6 大津波警報発表



NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時22分

沿岸に広がった。

筆者は、この大津波警報への引き上げと津波警報・注意報の範囲拡大の理由についても、気象庁の担当者取材した²³⁾。それによると、当初、「地震B」のマグニチュードを7.4と推定し、津波警報と注意報を発表していた。ところが、その後の解析で「モーメントマグニチュード」(「解説③」参照)²⁴⁾と呼ばれる、さらに詳しいマグニチュードが7.6であることがわかった。これを受けて、震源に近い石川県能登を大津波警報に引き上げたなどと説明している。

「解説③」でも記述したとおり、東日本大震災のときも、時間の経過とともにマグニチュード

解説③

モーメントマグニチュード

地震は地下の岩盤がずれる現象(断層運動)で、断層のずれの開始から終了までの間、地震波が発生し続ける。断層のずれが進行するに伴い、発生した地震波が地中を伝播して、震源により近い観測点から順次到達していくことから、時間が経過するにつれ、マグニチュードの算出に使用できる観測点数やデータの種類も増えていく。このため、地震を覚知してから順次実施する解析により、マグニチュードはより適切なものに更新されていく。

気象庁は、地震発生後、素早く算出できる「気象庁マグニチュード(Mj)」と、「モーメントマグニチュード(Mw)」の2種類を主に使用。このうち「モーメントマグニチュード」は、断層のずれが進行し観測データが増えるにつれてわかるため、「気象庁マグニチュード」よりも大きな地震のマグニチュードをより正確にとらえられる一方、判明するまでにある程度の時間がかかる。例えば東日本大震災の被害を引き起こした「東北地方太平洋沖地震」では、2011年3月11日の地震発生直後のマグニチュードは7.9(Mj)だったが、3月11日午後4時に8.4(Mj)、午後5時30分に8.8(Mw)、3月13日午後0時55分に9.0(Mw)とマグニチュードを順次更新した²⁵⁾。

が更新され、最終的に判明した「モーメントマグニチュード」は、国内の観測史上最大の9.0となった。

「PLUM法」や「モーメントマグニチュード」、それに「津波警報から大津波警報への引き上げ」など、ここまでの情報の出方を精査すると、東日本大震災と共通している部分があることが見て取れる。

しかし、東京大学地震研究所の古村孝志教授(地震学)は、筆者の取材に対し、能登半島地震では、東日本大震災よりも厳しい面があったと指摘する。古村教授によると、▶東日本大震災は、陸から100キロ以上離れた沖合で発生した巨大地震により引き起こされたが、▶能登半島地震は陸に近い場所で起きたため、強い揺れや津波の到達が早く、緊急地震速報や津波警報が能登半島の被災地では間に合わなかった、とみられる。このため、避難や身の安全を確保するという点では、東日本大震災よりも厳しい局面だったという見解を示した。

そのうえで、「こうした課題は、今後も日本海側で起きると考えられる地震や、想定震源域が陸にかかっている南海トラフの巨大地震でも同様である。津波から迅速に避難できるよう準備や訓練を重ねるほか、住宅の耐震化や家具の固定など安全な生活空間の確保を進めることが重要だ」と述べ、津波避難の猶予時間が短く、緊急地震速報が間に合わないことを念頭に置いた対策の推進が重要だと強調した²⁶⁾。

このあと、実際に津波が観測される。まず▶午後4時29分、▶石川県輪島市で1メートル20センチ、▶富山市で50センチの津波を観測したことを伝えた(表1)(画像7)。▶4時35分、輪島市で観測された津波の高さが「1メートル20センチ以上」に更新、▶4時39分、富

画像7 津波観測



NHK 総合テレビ、1月1日午後4時29分

山市で80センチの津波を観測したことを伝えた(表1)。

その直後の午後4時40分、緊急地震速報(表1の緊急地震速報⑥)が発表され「能登半島沖で地震 強い揺れに警戒 石川」と表示された。

午後4時41分、新潟県柏崎市で40センチの津波を新たに観測したことが伝えられた。

午後4時57分、緊急地震速報(表1の緊急地震速報⑦)「能登半島沖で強い地震 強い揺れに警戒 石川」が発表された。これは、4時56分に起きたM5.8の地震(図2の地震D)によるものである。

午後5時3分、緊急地震速報(表1の緊急地震速報⑧)が発表。内容は「石川県で地震 強い揺れに警戒 石川」だった。

午後5時7分、林芳正官房長官の会見中に緊急地震速報(表1の緊急地震速報⑨)「石川県で地震 強い揺れに警戒 石川」が発表された。

午後5時22分、緊急地震速報(表1の緊急地震速報⑩)が発表。「石川県で地震 強い揺れに警戒 石川」という内容だった。

ここまで地震発生から約1時間半後までを時系列でみてきた。

津波警報から大津波警報への引き上げ、津波の到達、震度7の観測、そして、緊急地震

速報が10回も発表された。

めまぐるしく情報が更新され、時には重なるという非常に複雑かつ緊迫した状況で、緊急報道の真価が問われた災害だったといえるだろう。

2章 大津波警報での「命を守る呼びかけ」初の本格運用

2章は、中山（以下、筆者）が執筆し、地震発生直後からのNHKの緊急報道を詳細に分析し、「命を守る呼びかけ」について考察する。

「大津波警報が出ました。いますぐ逃げること」。午後4時22分、大津波警報の発表直後に、NHKのアナウンサーが強い口調で叫ぶように呼びかけた。これは、「命を守る呼びかけ」の代表的なフレーズの1つである。

この「命を守る呼びかけ」は、東日本大震災の教訓をふまえ、NHKのアナウンサーが文言などを作り上げた。そして、緊急ニュースを担当するアナウンサーは、誰でも対応できるように訓練を積み重ねてきた。「はじめに」でも触れたように、能登半島地震での大津波警報は、東日本大震災以来の発表となった（画像8）。今回は、「命を守る呼びかけ」が、この大津波警報の発表下で、初めて本格運用されたケースとなったといえる（詳細は後述）。

画像8 大津波警報発表



NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時23分

このほか、「命を守るため」や「東日本大震災を思い出してください」「周りの人にも『津波が来るぞ、高台へ逃げろ』と呼びかけながら逃げること」など、見ている人たちの感情に訴えるさまざまな表現やフレーズを使い、よりいっその危機感を抱いてもらうために、強い口調で、叫ぶように呼びかけ続けた。

この「命を守る呼びかけ」とは具体的にどのようなものなのか、作られた経緯もふまえながら、今回の対応について分析していく。

2-1 「命を守る呼びかけ」が作られた経緯

前述のとおり、「命を守る呼びかけ」が作られたきっかけは、東日本大震災である。2万人以上の尊い命が奪われた大災害の悲劇を2度と繰り返すまいというアナウンサーたちの強い思いが込められている。筆者も、震災発生当時、盛岡放送局のアナウンサーで、大きな揺れが断続的に起きる中、呼びかけを続けた。その後、「命を守る呼びかけ」の作成の議論にも、当初から関わり続けてきた。

議論の発端は、東日本大震災の発生当日、津波からの避難の呼びかけにあたった多くのNHKアナウンサーが、自分たちの発したことばへの無力感を抱いたことであつた。なぜそれほど多くの命が失われてしまったのか。1人でも多くの人を救うことができたのではないだろうか。そして、より人々の心に届き、素早い避難行動に結びつく呼びかけの文言を新たに作ることはできないだろうかという問題意識から、震災発生後の2011年夏から話し合いが始まり、徐々に作り上げられてきた。

2-2 「命を守る呼びかけ」が作られるまで

実は、東日本大震災が起きる前も、アナウ

ンサーは、緊急時の呼びかけ文を用意しており、震災発生直後に繰り返し使った。例えば、「川の河口付近から離れてください」や「ビルの3階か4階以上に避難してください」などが挙げられる。しかし、東日本大震災では、河口付近だけでなく、河口から約3キロ離れた内陸でも津波で被害を受けた施設があった²⁷⁾。5階建ての建物の4階まで津波が到達し、多くの人が亡くなった事例もあった²⁸⁾。

また、伝える際の口調については、津波警報や大津波警報が出たとしても、基本的には、視聴者に冷静な行動をとってもらうために、落ち着いた口調で、情報をきちんと伝える点が重視されてきた。しかし、結果として多くの人が逃げ遅れたことから、「落ち着いた口調での呼びかけが避難行動につながらなかった可能性はなかったのか」という問題意識を持つアナウンサーもいた。

こうして呼びかけの見直しが始まった。その第1回となった会議が、東日本大震災の発生から3か月後に東京・渋谷のNHK放送センターで開かれた「震災報道を語る」²⁹⁾だった(画像9)。

筆者も盛岡放送局を代表して参加し、被災地の放送局のアナウンサーとしての視点から意見を述べた。会議では、危険が迫っていることをより感じてもらうため、「最初の数十分」は

ふだんの「冷静沉着」を、あえて捨てる。そして、「ふだんとは違う異常なトーンや口調」で伝えることで、住民に「特別なことが起きている」と感じてもらい、素早い避難行動につなげてもらうという考えで一致した。

会議のあと、「命を守る呼びかけ」の作成作業が本格化した。アナウンサーが定期的集まり、防災情報や避難の専門家の意見、それに東日本大震災の被災者への聞き取り調査の結果などを反映しながら、議論を重ねた。その結果、▶確実に伝わること、▶行動を促すこと、▶予断を与えないこと、を重視することが決まった。そのためには、東日本大震災でも避難の遅れにつながったと指摘されている、“自分だけは大丈夫”と思ひ込む「正常性バイアス」をいかに取り除くかが焦点となった。

その方法の1つとして導入が決まったのが、ふだんは努めて冷静さを心がけているアナウンサーが、ある瞬間を境に「強い口調で叫ぶように呼びかける」表現だった。

さらにもう1つ検討したのが、呼びかけのフレーズである。

この際、参考にしたのが、東日本大震災の茨城県大洗町^{おおあらいまち}の対応である。住民に「緊急避難命令、緊急避難命令」「大至急、高台に避難せよ」と命令口調で呼びかけたところ、多くの人が危機感を抱き、避難したことが確認されている³¹⁾。

ただ、NHKのアナウンサーが「避難せよ」などと明確に命令することはできない。しかし、命令口調でなくても「ふだんとは違うことば」を使うことによって、住民の危機意識を呼び起こし、自主的な避難を後押しすることはできる。そこで、考え出されたのが、「〇〇すること」というNHKアナウンサー独自の表現だった。

画像9 「震災報道を語る」の会議写真³⁰⁾



これは、例えば「逃げること」のように、フレーズの末尾を「こと」にすることで、文章としては、命令となっていないものの、避難を命令されているような印象を与えるとともに、災害の危険が迫っている地域の住民に対し、その人たちが「いま、この瞬間にすべきことは何か」を想起させる効果があると筆者は分析する。

また、末尾を「こと」で止めることで、「高台への素早い避難」や「周囲への声かけ」など、そのとき必要な行動を1つ1つ確認（念押し）し、ことばを通じて迅速な避難行動に導く効果もあると考える。

これを筆者は、「**念押しのことば**」と定義したい。

ただ、この言い回しを頻繁に使いすぎると、いわゆる「オオカミ少年」になりかねず、使う場面は「特に危険な場合」に限定したほうがいいのではないかなどの意見が出された。このため「大津波警報が発表された場合などの非常事態に限定する」という方針になり、スタジオなどに非常用の原稿として常備されるようになった。

また、このほかのフレーズについても検討が進められた。その代表例が「東日本大震災を思い出してください」である。東日本大震災で三陸沿岸を襲ったあの大津波と同じような津波が、自分たちの地域にも襲来する可能性があるということを想像してもらえれば、住民の危機意識を強め、素早い避難につながるだろうと考たからだった。しかし、このフレーズについては、3つの課題が指摘された。具体的には、①東日本大震災から時間が経過し、災害の記憶の風化が懸念されている中で、緊急性がどれだけ伝わるのか、②逆に当時の恐ろしさを鮮明に思い出し、動けなくなる人もいるのでは

ないか、③東日本大震災が起きた三陸沿岸とほかの地域では、津波の起こり方や到達の早さが異なるなど地域差があり、すべてのケースに適用できないのではないか、といったものだった。このうち課題②と③については、能登半島地震を含む、その後の地震で課題が現実のものとなった。詳しくは後述する。

なお、ここまでの記述をもとに、筆者の視点から「命を守る呼びかけ」とは何なのかを、下記でポイントとして押さえておく。

ポイント 「命を守る呼びかけ」とは

- ▶ 「命を守るため」や「いますぐ可能な限り高いところへ」「周りの人にも避難を呼びかけながら逃げること」など、感情に訴えるさまざまな表現やフレーズを使い、よりいっそうの危機感を抱いてもらうために、強い口調で、叫ぶように呼びかける
- ▶ 東日本大震災で避難の呼びかけにあたった多くのNHKアナウンサーが、自分たちの発したことばへの無力感を抱いたことが作成の発端
- ▶ 「避難せよ」などの明確な命令口調の代わりに、「〇〇すること」というNHKアナウンサー独自の表現が加えられた
→本稿で筆者は「念押しのことば」と定義
- ▶ 「東日本大震災を思い出してください」など、多様な表現がある

こうして作られてきた「命を守る呼びかけ」については、その後も検討や修正が続けられている。NHKのアナウンサーは、これをもとに訓練を積み重ねてきた。

2-3 これまでに行われた 「命を守る呼びかけ」

東日本大震災を教訓に作られた「命を守る呼

びかけ」。この表現やフレーズについて筆者が調べたところ、実は、能登半島地震の前に2度使われていた。1度目は、2012年12月7日に三陸沖で発生したM7.3の地震だった。宮城県沿岸に津波警報が出され、「東日本大震災を思い出してください」というフレーズをアナウンサーが初めて呼びかけに使った。これを見聞きした当時の住民からの反応はおおむね肯定的であったが、一方で「不快」や「怖い」といった否定的な意見もあった³²⁾。筆者はこの否定的な意見が出た理由について、次のように考えている。▶初めて使われたことばだったため驚いた人が多かったとみられること、▶当時は、東日本大震災の発生から1年9か月ほどしか経過していなかったうえ、震災の最大の被災地の1つ、宮城県を対象に発表された津波警報だったため、2-2で挙げた課題②で記述したように、震災当時の記憶を鮮明に思い出した人もいたとみられることなどが影響したと分析している。

2度目は、2016年11月22日に福島県沖で発生したM7.4の地震であった。地震発生直後に福島県沿岸に津波警報が発表され、その約2時間後には、宮城県内でも高い津波が観測されたため、宮城県沿岸にも津波警報が追加発表された³³⁾。この際もアナウンサーが「東日本大震災を思い出してください」「命を守るためいまずぐ逃げてください」と強い口調で避難の呼びかけを行った³⁴⁾。ただ、いずれも、津波警報発表時の呼びかけだったため、「逃げること」などの「念押しのことば」は使われなかった。

2-4 「命を守る呼びかけ」

大津波警報発表下で初の本格運用

2-4-1 東日本大震災以来の大津波警報発表

能登半島地震では、「石川県能登」に大津

波警報が発表された。これは東日本大震災以来で、このほかにも地震や津波に関する情報が数多く出された。こうした防災情報がどのように出たのかは、1-4に記述したとおりで、非常に複雑かつ緊迫した状況だった。

この重大な局面で、最初にスタジオに入ったのが山内泉アナウンサー、2番目に入ったのが中山果奈アナウンサーだった。いずれも2011年よりあとに入局しており、アナウンサーとしては東日本大震災を経験していない。この2人が、防災上最も重要な初動段階で「命を守る呼びかけ」をいかに的確に行うかが問われることとなった。

2-4-2 「命を守る呼びかけ」のフェーズ分け

ここからは、能登半島地震の発生から約1時間後までのアナウンサーの対応などを詳しく分析していく。この時間帯を選んだのは、以下の2つの理由による。▶第1が、大津波警報や津波警報が発表された最初動の段階で、「命を守る呼びかけ」の重要性が最も高かったと考えられること、▶第2が、緊急地震速報が次々に発表され、津波警報と重なるという、これまでにない事態が起きたこと、である。

時系列で追うと、最初の緊急地震速報や、津波警報の発表、さらに大津波警報への引き上げなどのタイミングで、アナウンサーの対応が大きく変わっていることがわかる。また、解説委員が加わることで、情報量だけでなく内容にも厚みが増したことも見て取れる。このため、本稿では、その局面に応じて、5つのフェーズに分けて、詳細に分析していくこととする。

具体的には、▶山内泉アナウンサーが、緊急地震速報の相次ぐ発表に対応した「フェーズ1」、▶次に、津波警報の発表で、口調が強

表2 5つのフェーズ

フェーズ1	午後4時6分～ 山内泉アナ：緊急地震速報の相次ぐ発表に対応
フェーズ2	午後4時13分～ 山内泉アナ：津波警報発表「強めの口調に」
フェーズ3	午後4時22分～ 山内泉アナ・中山果奈アナ：大津波警報での「命を守る呼びかけ」初の本格運用
フェーズ4	午後4時25分～ 中山果奈アナ：「命を守る呼びかけ」の“進化”
フェーズ5	午後4時46分～ 清永聡解説委員が参加：「異常事態」などのキーワードで危険の切迫さを強調 金沢局 宮崎浩輔アナ：輪島市内にある避難場所の詳細な地名読み上げ

まった「フェーズ2」、▶大津波警報への引き上げにより、山内アナウンサーと、その後交代した中山果奈アナウンサーが「いますぐ逃げること」などと「念押しのことば」を使い、大津波警報での「命を守る呼びかけ」を本格運用した「フェーズ3」、▶中山アナウンサーが「命を守る呼びかけ」のことばを独自に補い、いわば“進化”させた「フェーズ4」、▶そして、清永聡解説委員が加わり中山アナウンサーと協力して、津波の切迫した危険性などを伝えたほか、金沢局からも詳細な地名を伝えた「フェーズ5」とした(表2)。

2-4-3 「フェーズ1」緊急地震速報の相次ぐ発表に対応した山内泉アナウンサー
まずは「フェーズ1」から分析していく(表3)。最初にスタジオに入った山内泉アナウンサー(画像10)は、2017年入局で、東日本大震災のあとにアナウンサーとなった世代だ。1-4でみたとおり、午後4時6分に最初の緊急地震速報(表1の緊急地震速報①)が入り、揺れへの警戒などを落ち着いた口調で伝えた。また、この日が元日ということもあり、「**現在正月で、家族で集まっている方も多いかと思います。声をかけあって安全な場所で、けがをしないように過ごしてください**」などと、もともと用意されて

表3 フェーズ1

フェーズ1 山内泉アナ：緊急地震速報の相次ぐ発表に対応		
情報[時刻]	局面	アナウンス対応
緊急地震速報① [午後4時6分]	山内泉アナ：落ち着いた口調(冷静対応)	▶「 現在正月で、家族で集まっている方も多いかと思います。声をかけあって安全な場所で、けがをしないように過ごしてください 」
緊急地震速報②		
緊急地震速報③ (対象範囲拡大) [午後4時10分]	口調がやや強くなる	▶「先ほどには立っていなかった土ほこりが広い範囲で立っています」 ▶「姿勢を低くして頭を守ってください」 「揺れが収まるまで安全な場所にいてください」
緊急地震速報④ (対象範囲再拡大) [午後4時11分]		▶「 積雪の多い地域では、雪崩や屋根からの落雪にも注意をしてください 」 ▶「現在、東京・渋谷区のスタジオでもわずかに揺れを感じています」

画像10 特設開始時の山内泉アナウンサー



NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時6分

いる原稿にはない、その日の状況を意識した呼びかけも行った。この地震（表1の地震A）では「津波の心配なし」という情報が入ったため、揺れへの警戒を伝え続けた。

しかし午後4時10分、今回の甚大な被害をもたらした最大の地震（地震B）が発生し、2回目の緊急地震速報が発表される（緊急地震速報②）。さらに3回目（緊急地震速報③）（画像11）、4回目（緊急地震速報④）がたて続けに発表され、対象範囲も拡大された。

山内アナウンサーも、先ほどの地震（地震A）よりはるかに大きい地震が発生し、異常事態が起きていると考えたとみられ、口調がやや強くなった。石川県珠洲市役所に設置された

画像11 緊急地震速報③



NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時10分

カメラの映像から「先ほどには立っていなかった土ぼこりが広い範囲で立っています」（画像12）と「地震A」との違いを伝えたくて、「姿勢を低くして頭を守ってください」「揺れが収ま

画像12 土ぼこりが上がるカメラ映像



NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時12分

表4 フェーズ2

フェーズ2 山内泉アナ：津波警報「強めの口調に」		
情報 [時刻]	局面	アナウンス対応
津波警報発表 [午後4時13分] [午後4時16分] [午後4時18分]	山内泉アナ：一気に強めの口調	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 「津波警報です。津波警報が出ました。すぐに逃げてください」 ▶ 「東日本大震災を思い出してください」 ▶ 「情報はラジオやスマートフォンでも入手できます。テレビを見ていないで急いで逃げてください」
緊急地震速報⑤ [午後4時18分]	津波警報と緊急地震速報重なるも情報を仕分けて伝えた	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 「また繰り返し強い地震が襲ってきていると思います。倒れやすい家具などからは離れてテーブルや机の下に隠れてください」 ▶ 「ただ、沿岸の地域にお住まいの方、揺れが繰り返し来ている中ではありますが、<u>いますぐに逃げてください</u>。外は寒いとは思いますが、ためらわずにすぐに逃げてください」

るまで安全な場所にいてください」と、「緊急地震速報①」のときより、やや強い口調で呼びかけ続けた。

さらに「積雪の多い地域では、雪崩や屋根からの落雪にも注意をしてください」と季節や地域にあわせた呼びかけを行った。「現在、東京・渋谷区のスタジオでもわずかに揺れを感じています」と、揺れが広範囲に及んでいることにも触れた。

2-4-4 「フェーズ2」津波警報発表

山内泉アナウンサー「強めの口調に」

次に「フェーズ2」をみていく(表4)。

午後4時13分、津波警報が発表された。山内アナウンサーは、すぐさま「津波警報です。津波警報が出ました。すぐに逃げてください」と、語気を一気に強めて、避難を呼びかけた。また、「東日本大震災を思い出してください」というフレーズも2度にわたって使った。

しかし、語尾は「高台へ逃げてください」のように、一貫して「〇〇してください」としていた。ただ、午後4時14分に、「いますぐ可能な限り高いところへ逃げる」とコメントしたが、すぐに「逃げてください」と言い直した。これをみると、やはり2-3で考察した「〇〇すること」という「念押しのことば」は、津波警報では基本的には使わず、大津波警報で使うという方針になっていたことがわかる。

午後4時18分、「情報はラジオやスマートフォンでも入手できます。テレビを見ていないで急いで逃げてください」と、テレビの前から離れて逃げることを、あえて呼びかけた。このうち後半の「テレビを見ていないで急いで逃げてください」というフレーズについて、筆者は、山内アナウンサーがもともと準備していたか、日

ごろから考えており、津波警報という一刻を争う事態に直面したことで使ったとみている。

ただ、このフレーズは、テレビの放送に携わる者にとって、自己否定にもつながりかねない。しかし、筆者は、東日本大震災で自宅や職場などにとどまり避難が遅れた人が多くいた教訓から、津波の危険があるときは一刻も早く自宅などから離れるべきだと考えてきた。ゆえに、この局面で前述のフレーズを使ったことは的確な判断だったと考えている。

この直後の同18分、緊急地震速報(緊急地震速報⑤)が発表される。「また繰り返し強い地震が襲ってきていると思います。倒れやすい家具などからは離れてテーブルや机の下に隠れてください」と強い揺れに警戒を呼びかけるとともに、津波警報が出ている沿岸にいる人に対しては、「ただ、沿岸の地域にお住まいの方、揺れが繰り返し来ている中ではありますが、いますぐに逃げてください。外は寒いとは思いますが、ためらわずにすぐに逃げてください」と呼びかけ、津波警報に緊急地震速報が重なったものの、情報をきちんと仕分けて伝えていた。

2-4-5 「フェーズ3」大津波警報での

「命を守る呼びかけ」初の本格運用

ここで、最も重要な「フェーズ3」に着目する(表5)。

午後4時22分、石川県能登の津波警報が大津波警報に引き上げられた(画像13)。

ここで山内アナウンサーは、「大津波警報が出ました。いますぐ逃げる」と、「念押しのことば」を使った。東日本大震災以来となる大津波警報が発表された状況で、「命を守る呼びかけ」が初めて本格運用された瞬間だった。さらに、長い放送の歴史において、「念押しの

表5 フェーズ3

フェーズ3 山内泉アナ・中山果奈アナ：大津波警報での「命を守る呼びかけ」初の本格運用		
情報〔時刻〕	局面	アナウンス対応
大津波警報発表 〔午後4時22分〕	山内泉アナ： 大津波警報での 「命を守る呼びかけ」 初の本格運用の瞬間	▶ 「大津波警報が出ました。いますぐ逃げること」
〔午後4時23分〕	中山果奈アナに交代： 強い口調	▶ 「いますぐ可能な限り高いところへ逃げること」 ▶ 「近くに高台がなければ高いビルの上か、海岸から遠く離れたところへ逃げること」 ▶ 「決して立ち止まったり引き返したりしないこと」 ▶ 「周りの人にも『津波が来るぞ、高台へ逃げろ』と呼びかけながら逃げること」 ▶ 「みなさんで命を守ってください。命を最優先に、いますぐに逃げてください」

画像13 大津波警報に引き上げ



NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時22分

ことば」が強い意味を伴って初めて登場した瞬間だったと筆者は強調したい。

このあと午後4時23分に、中山果奈アナウンサーに交代し、「命を守る呼びかけ」が続けられた。2014年入局で、やはり東日本大震災以降にアナウンサーとなっている。中山アナウンサーは「いますぐ可能な限り高いところへ逃げること」「近くに高台がなければ高いビルの上か、海岸から遠く離れたところへ逃げること」「決して立ち止まったり引き返したりしないこと」と、次々に「念押しのことば」を強い口調で伝え続けた。また、「周りの人にも『津波が来るぞ、高台へ逃げろ』と呼びかけながら逃げること」と、いわゆる「率先避難」（「解説④」参照）を呼びかけたほか、「みなさんで命を守ってくだ

解説④

率先避難

災害時に、まず自分が率先して避難すること。率先して逃げる姿を見て、ほかの人も避難するようになり、結果的に多くの人を救うことにつながる³⁵⁾。

岩手県釜石市で小・中学生の防災教育にあたってきた現・東京大学大学院情報学環の片田敏孝特任教授は、『人が死なない防災』（2012年、集英社）で、東日本大震災での率先避難について、以下のように述べている。

グラウンドに地割れが走ったのを見て、「津波が来るぞ! 逃げるぞ!」と言って真っ先に逃げた釜石東中学校のサッカー部員たちは、模範的な率先避難者でした。それを見て、ほかの中学生たちも次から次へと逃げた。それを見た小学生たちも逃げた。さらに、それを見たおじいちゃん、おばあちゃんも逃げた。こうやって、率先避難者が真っ先に行動を起こすことによって、それが波及して行って、本当にギリギリのところでも多くの命を救うことができたわけです。

さい。命を最優先に、いますぐに逃げてください」と連呼した。

2-4-6 「フェーズ4」

「命を守る呼びかけ」の“進化”

続いて「フェーズ4」をみていく（表6）。

表6 フェーズ4

フェーズ4 中山果奈アナ:「命を守る呼びかけ」の“進化”		
情報 [時刻]	局面	アナウンス対応
[午後4時25分]	中山果奈アナ: 「命を守る呼びかけ」の “進化”	▶「早いところでは到達とみられますが、津波は繰り返し押し寄せます。東日本大震災の津波を思い出してください」
[午後4時27分]		▶「東日本大震災のときもはじめは海の様子、変化はみられませんでした。ただ、このあと津波が来ます」
津波観測 [午後4時29分]		▶「ここは大丈夫かと思うのは危険です。情報を待って逃げ遅れないようにしてください」
		▶「テレビの映像、気になるかと思いますが、テレビを消して、ああ消さなくていいです、もう逃げてください」
[午後4時32分]		▶「大切な家財、大切なお家(うち)、あると思いますが、みなさんの命が何よりも重要です。いますぐ可能な限り高いところへ逃げること」
		▶「海が見える海岸線を映していますが、少し波が引いているようにも見えます」
		▶「大きな津波が来る前には、こうして急激に波が引くことがあります」

ここでは中山アナウンサーが、もともと用意されていた「命を守る呼びかけ」のフレーズを次々に変えていった。例えば、2-4-4の「フェーズ2」で山内アナウンサーが2度にわたって使った「東日本大震災を思い出してください」というフレーズである。午後4時25分、津波の予想到達時刻を伝えている際に、「早いところでは到達とみられますが、津波は繰り返し押し寄せます。東日本大震災の津波を思い出してください」と、もともと用意されていた「東日本大震災を思い出してください」というフレーズに、「津波」ということばを加え、より強く想起させるよう変化させた。

午後4時27分に、石川県七尾市の海の様子が映し出された際(画像14)には、「津波の様子、潮位の変化は確認できませんが、石川県能登、早いところでは津波は到達とみられます。東日本大震災のときもはじめは海の様子、変化はみられませんでした。ただ、このあと津波が来ます。大津波警報が石川県能登地方に発表されています。いますぐ可能な限り高いところ

画像14 石川県七尾市のカメラ映像



NHK 総合テレビ, 1月1日午後4時27分

へ逃げること」と、映像で海面に変化がみられなくても、安心してはいけないという、東日本大震災の教訓をふまえて伝えていた。

そして、午後4時29分、津波観測の情報が入り、実際に津波が来ていることがわかると、さらに表現のバリエーションが増えていった。

まずは、「逃げ遅れ」を防ぐための大胆な呼びかけがあった。

「ここは大丈夫かと思うのは危険です。情報を待って逃げ遅れないようにしてください」と述べたうえで、「テレビの映像、気になるかと思いますが、テレビを消して、ああ消さなくていい

です、もう逃げてください」と呼びかけた。

これは、2-4-4の「フェーズ2」で記述した、山内アナの「テレビを見ていないで急いで逃げてください」というフレーズを、さらに変化させ、緊迫の度合いを上げた。鍵になるのは、「テレビを消して、ああ消さなくていいです」というフレーズである。筆者は、これはとっさに出てきたことばだと、とらえている。しかし、結果として、テレビを消している時間をもったいないくらいに危険が切迫していることを印象づけられたと考えている。

さらに、「大切な家財、大切な^{うち}お家、あると思いますが、みなさんの命が何よりも重要です。いますぐ可能な限り高いところへ逃げること」と述べ、上記のフレーズとあわせて、命を守るには一刻の猶予もないことを強調していた。

そして、午後4時32分、富山県入善町^{にゅうぜんまち}の海岸の中継映像が入った。このときも、前述の石川県七尾市のカメラと同じように海の様子からは津波は確認できなかった。そこで中山アナウンサーは、「海が見える海岸線を映していますけれども、少し波が引いているようにも見えます」とコメントした。さらに「大きな津波が来る前には、こうして急激に波が引くことがあります」と伝え、避難の呼びかけを続けた。これが実際に「引き波」だったのかは本稿執筆時には確認できていないが、そのときの状況にとっさに津波の特徴を加え、避難を促すという工夫がみられた。これも「カメラで実際に津波をとらえてから避難したのでは間に合わない」という東日本大震災の教訓をふまえたものと筆者は考えている。

以上のように、中山アナウンサーは、そのときの状況にあわせた思い切った呼びかけを次々に繰り返し出し、避難を呼びかけ続けた。

筆者はこれを「命を守る呼びかけ」の“進化”と位置づけたい。この“進化”の背景について、筆者はこれまでのアナウンサーとしての経験から次のように考える。

スタジオにいるアナウンサーは、避難場所などの映像が見られず、現地の状況が細かく把握できないため、自分の呼びかけによって危険な地域にいる人たちが本当に避難してくれているのかがわからない。このため、中山アナウンサーは、まだ避難せず自宅などにとどまっている人の姿を想像しながら呼びかけていたのではないか。

そして、筆者を含め、災害報道に携わってきたアナウンサーの頭に常にあるのは、先輩たちから語り継がれ、自らの取材でも目の当たりにしてきた東日本大震災などの災害の惨状である。悲劇を繰り返さないため、1人でも多くの命を救いたいという強い思いが、“進化”した独創的な呼びかけとなって発せられたのだと考える。

2-4-7 「フェーズ5」

解説委員と地元局が加わり情報に厚み
キーワードで危険の切迫さを強調
詳細な地名の読み上げも

最後に「フェーズ5」を詳しくみていく(表7)。

午後4時46分、災害担当の清永聡解説委員がスタジオに入り解説を始めた。アナウンサー1人のいわゆる「ワンオペレーション」から伝え手が複数になったことや、災害の特性や警戒点を熟知している記者目線の解説が加わったことで、情報量が増えたほか、違った角度からの呼びかけも次々に登場した。清永解説委員は、まず、過去の災害の例を出しながら、日本海側で起きる津波の到達の早さなど、その

表7 フェーズ5

フェーズ5 清永聡解説委員が参加:「異常事態」などのキーワードで危険の切迫さ強調 金沢局 宮崎浩輔アナ: 輪島市内にある避難場所の詳細な地名読み上げ		
情報 [時刻]	局面	アナウンス対応
[午後4時46分]	清永聡解説委員が参加: 中山果奈アナと2人で呼びかけ 警戒点などの情報量が増える	▶「先ほどから緊急の呼びかけが続いていて、なぜこれだけ緊急で呼びかけるのかというふうにお感じの方、いるかもしれないのですが、災害を担当している私たちからすると、 <u>日本海側で地震が来た場合、とにかくあつという間に津波が来るという、たいへん恐ろしい共通性があります</u> 」 ▶「日本海側の地震は、とにかく津波がすぐに到達する、すぐに到達するという危険性があります。 <u>今回もすでに津波が到達したと推定されています。今回の場合もたいへん危険な状態だと考えられますので、とにかく津波警報、大津波警報が出ている地域の方は、高いところへ向かってください</u> 」
[午後4時51分]		▶「 <u>すでに津波による浸水が始まっていると考えてください。いま、たいへん危険な状態です。すぐに避難をしてください</u> 」
[午後4時56分]	金沢局 宮崎浩輔アナ: 輪島市内にある避難場所の詳細な地名を伝える	▶「輪島市のみなさんにお伝えします。いますぐ海や川から離れてください。絶対に様子を見に行かないでください。細かい地名までお伝えします。 <u>一本松公園や、鳳来山公園</u> など高い場所を目指してください」[沖合には、 <u>舢倉島</u> という島があります。 <u>舢倉島開発総合センターや、舢倉島給水タワー</u> にすぐに避難するようにしてください」
緊急地震速報⑦ [午後4時57分]	中山アナ: 大津波警報と緊急地震速報重なる 内陸と沿岸で情報を明確に仕分けて伝えた	▶「 <u>内陸にお住まいのみなさん。倒れやすい家具などからは離れてください。テーブルや机の下に隠れてください</u> 」 ▶「 <u>ただ、避難をしているという方は、揺れる中ではありますが避難をやめないでください。高いところへ逃げ続けてください</u> 」
[午後5時4分]	清永解説委員	▶「日本海側で起きた地震による津波というのは、きわめて短時間で押し寄せます。輪島港などではすでに津波とみられる潮位の変化が大きく観測され、現在も継続しています。この災害、いまでも続いているのだと、 <u>ふだんとは違う、現在は異常事態であるというふう</u> に、揺れが強かった地域の方は、避難を第一に心がけてください」
[午後5時5分]	清永解説委員	▶「現在は日没の時間を過ぎています。北陸地方も徐々に暗くなってきています。暗くなると避難することが難しくなります。 <u>現在が最後のチャンスであると思って避難を続けてください</u> 」

特徴や危険性について解説した(以下、清永解説委員のコメントは一部中略)。

先ほどから緊急の呼びかけが続いていて、なぜこれだけ緊急で呼びかけるのかというふうにお感じの方、いるかもしれないのですが、災害を担当している私たちからすると、**日本海側で地震が来た場合、とにかくあつという間に津波が来るという、たいへん恐ろしい共**

通性があります。例えば昭和58年、1983年の日本海中部地震では、わずか8分で津波が到達しています。

そのうえで、フェーズ4までに使われてきた「東日本大震災を思い出してください」というフレーズについて、「日本海側の津波はすぐに到達する特徴があり、性質が違う」ことを補足し、「たいへん危険な状態」だと警戒を強く呼びかけた。

「東日本大震災を思い起こしてください」という呼びかけをしているのですが、今回の地震は日本海側だけに、さらにすぐに到達してしまうという、たいへん危険な状態です。繰り返します。日本海側の地震は、とにかく津波がすぐに到達する、すぐに到達するという危険性があります。今回もすでに津波が到達したと推定されています。今回の場合もたいへん危険な状態だと考えられますので、とにかく津波警報、大津波警報が出ている地域の方は、高いところへ向かってください。

午後4時51分、富山県入善町の海岸の映像が入り、津波とみられる高い波が岸壁を乗り越えている様子が映し出された。清永解説委員が「すでに津波による浸水が始まっていると考えてください。いま、たいへん危険な状態です。すぐに避難をしてください」と述べ、危険が迫っていることを語気を強めながら具体的に伝えた。

■ 地元局からの詳細な地名の読み上げも

午後4時56分、地元・金沢放送局のスタジオから、宮崎浩輔アナウンサーがヘルメットをかぶった姿で伝え始めた（画像15）。この中で、輪島市内にある津波避難場所の詳細な地

画像15 地元・金沢局からの呼びかけ



NHK 総合テレビ、1月1日午後4時56分

名を伝えた（以下、宮崎アナウンサーのコメントは一部中略）。

輪島市のみなさんにお伝えします。いますぐ海や川から離れてください。絶対に様子を見に行かないでください。細かい地名までお伝えします。一本松公園や、鳳来山公園ほうらいざんなど高い場所を目指してください。

沖合には、へぐらじま 舳倉島という島があります。舳倉島開発総合センターや、舳倉島給水タワーにすぐに避難するようにしてください。

ここまで伝え終わったところで、午後4時57分、「緊急地震速報⑦」が発表され、再び東京のスタジオに戻り、中山アナウンサーが、警戒を呼びかけた。

「内陸にお住まいのみなさん。倒れやすい家具などからは離れてください。テーブルや机の下に隠れてください」と揺れに対する呼びかけをした。「ただ、避難をしているという方は、揺れる中ではありますが避難をやめないでください。高いところへ逃げ続けてください」と述べ、大津波警報と緊急地震速報が重なった中、▶内陸部と、▶津波からの避難が最優先の沿岸部とで、情報を明確に仕分けて伝えた。

■ 解説委員がキーワードで危険の切迫さを強調

午後5時4分、清永解説委員が、危険がさらに切迫していることを「異常事態」というキーワードを使って伝えた。

日本海側で起きた地震による津波というのは、きわめて短時間で押し寄せます。輪島港などではすでに津波とみられる潮位の変化が

大きく観測され、現在も継続しています。この災害、いまま続いているのだと、ふだんとは違う、現在は異常事態であるというふうに、揺れが強かった地域の方は、避難を第一に心がけてください。

さらに5時5分、清永解説委員が「最後のチャンス」というキーワードを使い、まだ避難していない人などに対して強い呼びかけを行った。

現在は日没の時間を過ぎています。北陸地方も徐々に暗くなってきています。暗くなると避難することが難しくなります。現在が最後のチャンスであると思って避難を続けてください。

ここまでフェーズ1から5までを詳しくみてきた。大津波警報での「命を守る呼びかけ」が初めて本格運用され、アナウンサーとしては東日本大震災を経験していない山内・中山の両アナウンサーがそれを実践した。また状況に応じてフレーズを変え、呼びかけを“進化”させた。さらに、災害担当の清永解説委員とかけあいながら伝えることで、情報の量と内容に厚みをもたらした。

この2人のアナウンサーの対応について、「命を守る呼びかけ」の議論の当初から関わってきた筆者は、議論に参加してきた数多くの先輩アナウンサーの思いを受け継いでくれたと感じている。そのうえで、「命を守る呼びかけ」を自分のことばで臨機応変に伝えることの重要性を教えてくれたと考えている。

2-5 今回の「命を守る呼びかけ」からみえた課題

2-5については、中山と中丸（以下、筆者）

が共同で論じていく。2-4-4や2-4-6で述べたとおり、今回は、「東日本大震災を思い出してください」というフレーズが何度も使われた。ただ、1-3で述べたとおり、今回の津波は早いところでは、地震発生から数分後に到達していたのが特徴である。陸から離れた三陸沖で発生し、大きな被害をもたらす津波が到達するまで30分ほどの時間があったとされる東日本大震災³⁶⁾とは状況が異なっていた。

これは、1-3の東北大学災害科学国際研究所の今村文彦教授や1-4で紹介した東京大学地震研究所の古村孝志教授のコメントにもあったとおり、日本海側で起きる津波の特徴で、2-4-7に記述した清永解説委員の指摘はきわめて適切だったと考える。

一方で、筆者は、この“日本海側で起きる津波はとにかく早く到達するのが特徴”という情報を、もっと早く、できれば津波警報の発表直後にこそ伝えるべきだったという課題を、今回の事例をふまえて提起したい。

その理由として、以下の4つを挙げたい。

▶第1が、今回、「石川県能登」では、津波警報が発表された時点で「到達か」となっていたこと（画像16）。

▶第2は、1-3で記述したとおり、同じ日本海側で発生し甚大な被害を出した日本海中部

画像16 「到達か」と伝えた画面



NHK 総合テレビ、1月1日午後4時14分

地震と北海道南西沖地震が前年の2023年に、いずれも発生から40年と30年の節目を迎え、日本海側の津波の到達の早さに改めて注目が集まっていたこと。

▶第3が、1-2で述べたように、2023年5月に能登半島で起きた地震のあと、政府の地震調査委員会が「今後、海底で規模の大きな地震が発生した場合、津波に注意する必要がある」と指摘していたこと。

そして▶第4は、2-2で課題として挙げたうちの③で記述したとおり、「東日本大震災が起きた三陸沿岸とほかの地域では、津波の起こり方や到達の早さが異なるなど地域差があり、すべてのケースに適用できないのではないか」という点は、「命を守る呼びかけ」を作成する議論の過程ですでに提示されていたことである。

これらをふまえると、「**日本海側で発生した津波はあっという間に到達します。一刻も早く逃げてください**」というような、発生場所に応じた警戒コメントを準備し、すぐに出せるようにしておく必要性を今後に向けて指摘したい。

また、大津波警報や津波警報が発表され、津波への対応が最優先の中で難しいとは思いますが、気象庁の震度階級で最も高く、結果的に津波よりも多くの犠牲者を出した「震度7」という激しい揺れや、それに伴って発生した火災への警戒を、もう少し高い頻度で伝えられなかったのかという点も、今後の課題と考える。

また、被災した地元の放送局からの情報発信をできるだけ速やかに行うことの重要性も浮き彫りになった。2-4-7で記述したとおり、地震発生から約50分後の午後4時56分に金沢放送局のスタジオからアナウンサーがヘルメットをかぶった姿で、「一本松公園」や「鳳来山公園」などの詳細な避難場所の地名を伝えた。

発生したのがコロナ禍明けの元日だったため、久しぶりに帰省した人や観光客など土地勘のない人も多くいたとみられ、迅速な避難をするうえで、「どこへ逃げればいいのか」を具体的に知ることはきわめて重要である。また、住民にとっては、「身近な地名」が伝えられることや、「地元番組でふだんから見ているアナウンサーから呼びかけられると避難しようと思う人が比較的多い」という調査結果もある³⁷⁾。

能登半島地震のような災害では、初動段階の中でも最初期は、地方局に比べ、態勢が充実している東京のスタジオが担わないといけないうのは今後も変わらないだろう。だが、できるだけ早く地元からの詳しい情報を伝えることの重要性についても改めて突きつけた災害だったと筆者は考える。

今回の「命を守る呼びかけ」については、直後から新聞各紙に取り上げられたほか、SNSでも話題となった³⁸⁾。このうちX(旧Twitter)では、「NHKのアナウンサーが叫んでいたので逃げた」「命を守るために大正解だった」という声があった一方、「怖かった」という意見もみられた。

こうした意見もふまえ、能登半島地震における「命を守る呼びかけ」が、どのくらいの人に届き、実際の避難行動につながったのかなど、その効果についての検証が必要になると考えている。今後、詳しい調査の実施を検討したい。

3章 災害関連死の危険 過去の教訓は生かされたのか

3章は、中丸(以下、筆者)が執筆する。3章では、生き延びた人たちが余儀なくされた、過酷な避難生活と、それによる災害関連死の

危険性について考えていく。災害関連死は、阪神・淡路大震災以降、災害が起きるたびに課題とされてきた。過去の教訓は生かされたのか。『ニュース7』の内容をもとに、地震発生直後から2週間後までを考察していく。

3-1 地震発生直後の過酷な避難生活

3-1-1 「トイレ問題」や「感染症対策」などが課題に

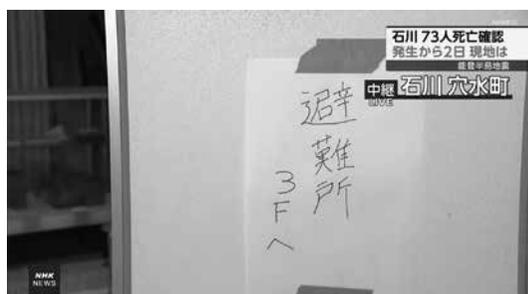
まず、地震発生当日の1月1日には、石川県七尾市の体育館に避難している人たちの様子を金沢放送局の記者が中継で伝えた。(板張りの床で冷えないよう)隣の武道館から畳が運び込まれ、ストーブも1台ついたが、肌寒く十分とはいえない。避難した人たちは自前のコートや布団などで暖をとっている状態だ、という内容だった。地震の発生直後で、大津波警報や津波警報が継続し、繰り返し緊急地震速報が出ている中、「とにかく避難してきた」「避難所を開設したばかり」という状態で、避難所の環境整備まではまだ手が回っていない状態だったといえる。

翌1月2日には、避難生活の長期化が予想されることを受けて、社会部の記者が避難生活上の注意点について解説した。具体的には、▶「避難所などに十分な暖房がない場合、お年寄りを中心に低体温症の危険性があるので注意」、▶「車の中で避難している人は、一酸化炭素中毒やエコノミークラス症候群に注意」、▶「停電中の自宅で過ごしている人は一酸化炭素中毒・火災に注意」などと呼びかけた。

1月3日には、石川県の穴水町役場からアナウンサーが中継で伝えた(画像17)。

▶役場の3階に避難所が設けられたが、停電でエレベーターが動かないため階段をのぼっ

画像17 穴水町役場からの中継



NHK 総合テレビ, 1月3日午後7時18分

画像18 トイレが危機的な状況



NHK 総合テレビ, 1月3日午後7時21分

て移動していること、▶食料や水など支援物資が足りていないこと、などを伝えた。

その後、トイレの問題が伝えられた。▶石川県穴水町の吉村光輝町長は「どの避難所についても、トイレは今、危機的な状況だと思っている」(画像18)。▶石川県志賀町の稲岡健太郎町長は「仮設トイレで断水を乗り切ろうとしているが、仮設トイレのくみ取りが追いついていない状態」とコメントした。また、▶石川県珠洲市の泉谷満寿裕市長は、県の災害対策本部の会議の中で、「至急、仮設トイレが必要だ」と訴えた。

また専門家からは、避難所でのインフルエンザなどの感染症対策の必要性について指摘があった。

3-1-2 農業用ハウスで避難生活

さらに1月7日には、石川県輪島市で、指定の避難所に入りきれなかった多くの人たちが、農業用ハウスで避難生活を送っている状況が報じられた。

持病を抱え寝たきりの状態の95歳の女性が毛布にくるまって横になっている様子も映し出された。指定の避難所ではないため、自治体からの物資も届かないという事情も伝えられた。

厳しい冷え込みと大雪、そして余震。その中で、農業用ハウスで過ごさざるを得ないというのは、近年起きた災害の中でも、きわめて過酷な避難生活を余儀なくされたといえる。

3-1-3 浮かび上がった

「広域避難・2次避難」の課題

そして1月11日には、石川県珠洲市の高齢者施設から、ヘリコプターで愛知県の医療機関へ、お年寄りを避難させる「広域避難」が始まったことが伝えられた。また、22の都道府県が、被災者の受け入れを表明したこと（1月11日午後5時時点、NHKまとめ）、石川県も避難所からホテルや旅館などへの「2次避難」を加速させる方針であることを報じたが、受け入れの調整などには時間がかかるという。

さらに避難所からは、「2次避難」について、県から具体的な手続きの方法が伝えられていないため、移動が進められないという声が出ており、県にすみやかに説明してほしいと求めていることも伝えられた。

そして地震発生から2週間となった1月15日には、石川県七尾市の高校の武道場に設置された避難所から中継で伝えた。90人ほどが避難生活を送っているが、板張りの床に体操用のマットを敷き、その上で寝起きしてきたという

ことで「底冷えもする」という声もあったという。一方、この日、断熱効果がある畳が搬入されるなど、少しでも環境を整えて、被災者の健康を守るための工夫が続けられていることが伝えられた。

3-1-4 災害関連死の危険性が高まった 避難生活

ここまでみてきたとおり、被災地の避難所の環境は非常に過酷だったといえる。冷え込みが厳しく、雪の多い時期に起きた災害だったうえ、余震も相次ぐ中、災害関連死の危険性がきわめて高まっていた。

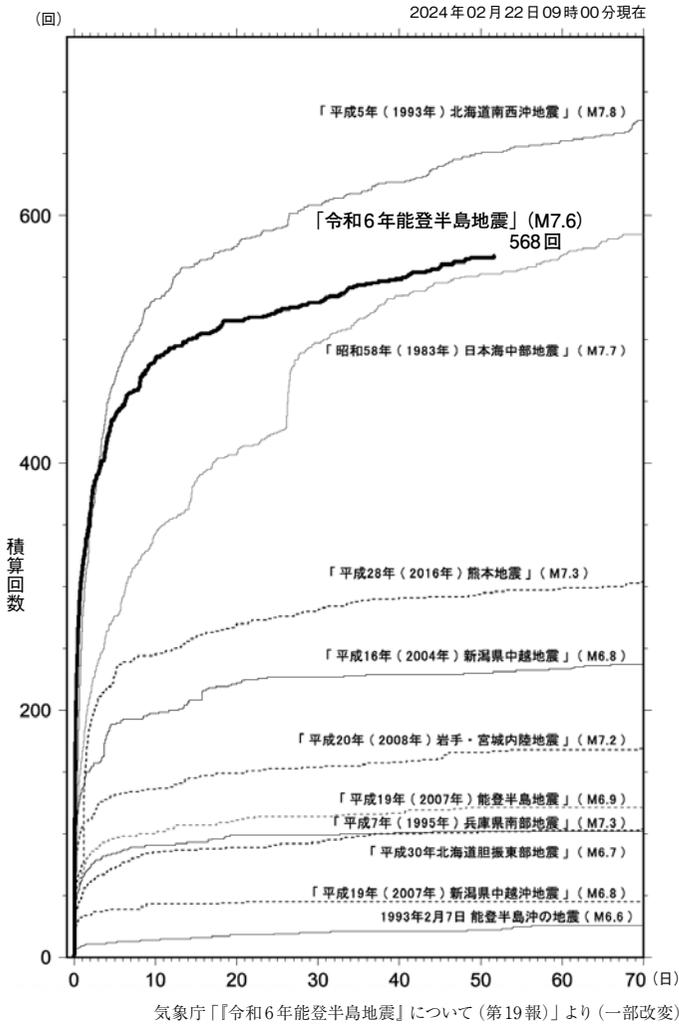
図3は、2月22日午前9時現在の地震発生回数（M3.5以上）を示している。能登半島地震では568回に達し、阪神・淡路大震災（図3では「兵庫県南部地震」）や新潟県中越地震、熊本地震などを大きく上回っている³⁹⁾。

また、この状況で、間仕切りもなく、板張りの床にマットを敷いただけの状態での避難生活を送らざるを得ない避難所があった。そして3-1-2でみたとおり、指定避難所に入れず、農業用ハウスで生活せざるを得ないという、さらに過酷な避難生活を送った人たちもいた。これに加えて、トイレが足りないという、衛生上、深刻な状況も表面化した。

こうした課題は、阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災、そして熊本地震などで繰り返され、そのたびに改善すべきだと指摘されてきた。

阪神・淡路大震災が起きた当時、兵庫県の職員で、現在は神戸市にある「人と防災未来センター」の坂本誠人研究調査推進員は、NHKの取材に対し、次のように指摘している。
▶能登半島地震は、阪神・淡路大震災と比べ、

図3 地震発生回数 (M3.5以上)



える。まずは、過酷な避難生活をどう改善するかという課題について、参考にすべき国際基準がすでにあることを摘示したい。

それは、災害時に設置する避難所の環境に関して「最低限の基準」を定めた「スフィア基準」だ。アフリカ・ルワンダの難民キャンプで多くの人々が亡くなったことを受けて国際赤十字などが1997年に作ったものである。2016年の熊本地震で、「災害関連死」と認定された人が、建物の倒壊など地震の直接の影響で亡くなった人の4倍以上に達したことなどをきっかけに注目された。

「スフィア基準」では、▶(寝返りを打てるよう)1人あたりのスペースは、最低3.5平方メートル確保する、▶トイレは20人に1つの割合で設置する、▶(一般的に女性はトイレにかかる時間が男性の3倍必要になるため)男性と女性のトイレの割合は1対3とするなどの具体的な数値目標も定められている。

支援活動の面で改善された点もあった。▶一方、自主避難所ではプライバシーを守る仕切りもなく、毛布にくるまって過ごしている姿が見られるなど、避難所での被災者の生活環境は29年前と大きく変わっていない⁴⁰⁾。

3-2 過去の教訓をどう生かすか

3-2-1 スフィア基準

ここまでみてきた状況をふまえ、筆者は、過去の教訓をどう生かすかが喫緊の課題だと考

海外では、この「スフィア基準」をもとにした対策が進められている。これを受けて、熊本地震のあと、災害医療の専門家は、日本では「スフィア基準」が浸透せず劣悪な環境の避難所が設置され続けていて、日本の避難所だけが世界から置いていかれる、避難所の考え方を根本から変えないといけない、という危機感を示していた⁴¹⁾。

3-2-2 関東大震災の「震災大疎開」

さらに、3-1-3で述べたとおり、「広域避難」の課題も浮き彫りになった。断水や停電、余震が続く中、被災した自治体にとどまり続けるのではなく、一時的に、被災地から離れた別の自治体に移る、というものだ。

実は、100年前の関東大震災でもすでに行われていた。地震発生当日（1923年9月1日）の午後には、総武本線や東海道本線、中央本線、東北本線、山手線などが一部区間で早くも運転を再開した⁴²⁾。列車には大勢の人が乗り込み、地方の親戚の家などに疎開した。筆者は、これを「震災大疎開」ともいうべき状態だったと指摘。2023年9月に発表した論考で、この「震災大疎開」（=現在の「広域避難」）の重要性について提起した⁴³⁾。この中で、京都大学防災研究所の矢守克也教授（防災心理学）の提言について、以下のように記述した。

矢守教授は（略）2016年の熊本地震のときも▶「マイカーで30分走って銭湯に行く」、▶「列車で2時間かけて福岡に避難する」、などの被災者の行動がみられたことを例示。被災地から少し離れば「日常」があるという震災は、これまでもたくさんあったと指摘している。そのうえで「**避難所の劣悪な環境が多くに関連死の原因にもなっている。『住民は自分の住んでいる自治体内だけで避難する』というこれまでの常識や法制を変え、今後は他地域への『積極的な疎開』も考えるべきだ**」と提言している。

また、能登半島地震が発生した直後の筆者の取材に対し、矢守教授は、「このような局所的に甚大な被害が出た災害で、被災地にとど

まり続けるのは非常に危険だ。避難所生活や壊れた自宅での生活は先が長く、希望する方、可能な方は、**広域避難＝疎開すべきで、それを基軸に据えた支援と準備が必要だ**。一方、**広域避難が難しい方もいるので、そういう方への配慮と支援の必要もある**」と話していた。

3-2-3 広域避難の“事前準備”

さらに、能登半島地震においては、3-1-3で記述したとおり、広域避難や2次避難をしようにも、県から避難所側に具体的な手続きの方法が伝えられておらず、進められないという状況があったと報じられた。これをふまえると、やはり広域避難は、事前に準備しておかないとすぐには実行に移せない現実が明らかになったといえる。

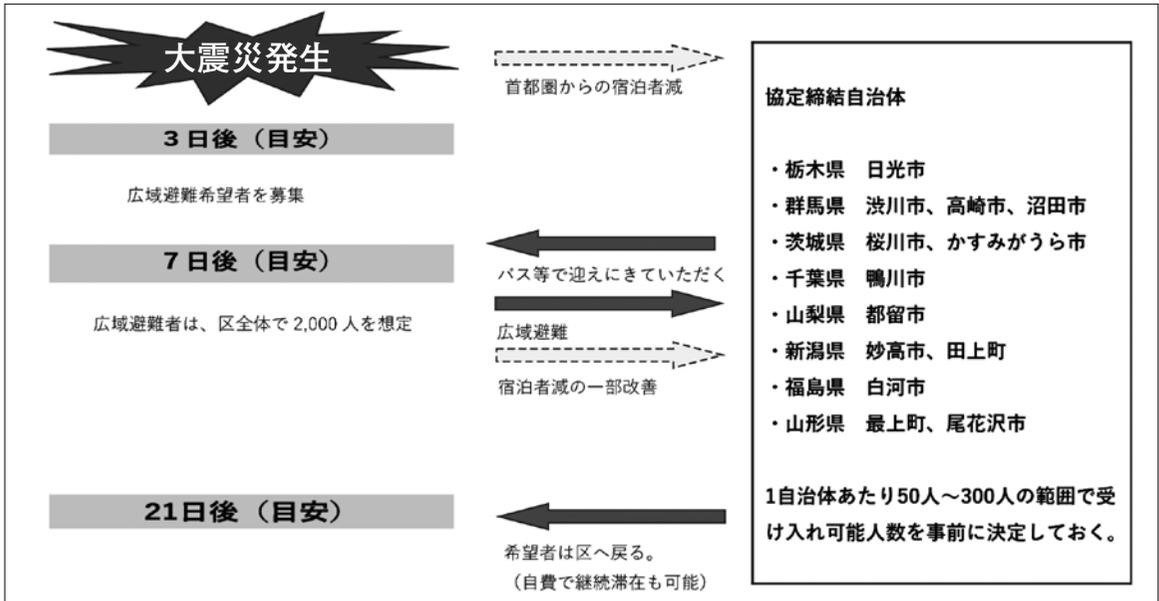
実は、この事態を早くから想定し、対応を進めている自治体がある。東京の板橋区だ。板橋区は、2023年8月末、東北や関東、山梨県、新潟県の13の自治体と協定を結んだ。

協定では、首都直下地震などの大災害が発生し、板橋区の住民の避難生活が長期化する可能性がある場合、協定を結んだ自治体に避難者を受け入れてもらう「広域避難」を実施するとしている。その流れを以下に示す（図4）。

まず、▶地震発生から3日後を目安に「広域避難」を希望する人を募集する。そして、▶7日後を目安に、協定を結んだ自治体に、バスなどで迎えに来てもらい、その自治体のホテルなどの民間施設に滞在してもらう、という計画だ。

滞在期間は、地震発生後おおむね3週間。受け入れ人数は1自治体あたり50人から300人程度で、板橋区全体では、後期高齢者を中心に約2,000人と想定している。また、避難した住民が慣れない土地でも安心して避難生活

図4 板橋区の広域避難の流れ



板橋区ホームページより

を送れるよう、協定を締結した自治体を相互に訪れるなど、ふだんから交流する機会を設けるといふ。こうした広域避難を事前に想定した協定は全国で初めてだ⁴⁴⁾。

3-2-1でもみたとおり、熊本地震では「災害関連死」と認定された人が、建物の倒壊など地震の直接の影響で亡くなった人の4倍以上に達した。板橋区は、熊本地震の被災地に応援の職員を派遣した経験などから、この教訓を重く受け止め、災害関連死をなんとしても防がなければならないという意識を持って対策を進めた結果、上記の協定の締結に至ったという。

板橋区防災危機管理課の荒張寿典課長は、筆者の取材に対し、次のように話している。

「今回、協定を結んだ自治体は、首都直下地震の際には被災していないと想定され、そこへ移ることで、被害を受けた板橋区内にとどまり過酷な避難生活を送るよりは快適な環境で安心して過ごすことができ、災害関連死を防ぐこと

ができると考えている。ただ、災害が発生してから調整すると時間がかかることが考えられるため、事前に協定を結び、広域避難を迅速に行えるよう準備を整えた」

そのうえで、自治体だけでは限界があるとして、政府に対し、次のように訴えた。

「今回の能登半島地震でも広域避難が課題になっている。政府には、広域避難を迅速にできるよう準備する動きをほかの地域に広げるとともに、激甚災害の指定時に、政府の支援メニューとして、広域避難にかかる費用を国が負担する仕組みを作ってほしい」⁴⁵⁾

3-3 広域避難の推進に欠かせないメディアの役割

広域避難をめぐることは、前述のとおり、筆者は関東大震災でも行われていたことを2023年9月に発表した論考で指摘した。この中で、被災者の受け入れ先だけでなく、移動手段の確

保などの重要性についても示した。具体的には、「計画運休」や「運転再開の見通し」など災害時の交通情報の重要性がこれまで以上に増すことが考えられ、正しい情報を的確・迅速に伝えるメディアの役割はさらに大きくなるだろうと記述した。

能登半島地震では、このメディアの役割が試される事態となった。例えば交通情報では、地震発生翌日の1月2日午後になって、北陸・上越新幹線が全線で運転を再開した⁴⁶⁾。一方、被災地では影響が長期化したものも多く、このうち道路は、亀裂や陥没が生じた影響で通行できない箇所が数多くあり、長期間にわたって人や物資の輸送が滞った。

また、ライフラインの情報は、これまでの災害のように、被災地にとどまり避難生活を続ける人にとって重要だただけでなく、今回は「長期化する見通し」を伝えることで、広域避難の実施を判断する重要な要素になったといえる。

これらを鑑みると、被災者の避難生活の向上や、広域避難の検討において、メディアの発信するきめ細かな情報の役割の重要性が再確認された災害だったと筆者は考える。

おわりに

ここまで能登半島地震の発生から約2週間までに浮き彫りになった課題について考察してきた。▶東日本大震災以来となる津波警報の発表と、その状況下での「命を守る呼びかけ」の初めての本格運用。また、▶避難生活の改善や広域避難のあり方。いずれも過去の教訓から生まれた、命を守るための手がかりがあったことがみえてきた。

能登半島地震は、最大震度7の激しい揺れ

や火災に加え、津波がきわめて短時間で被災地を襲うという過酷な災害で、避難や身の安全の確保が非常に難しい状況だった。

一方で、▶日本海側で起きる津波は早く到達する、▶情報を待ってから避難したのでは間に合わない場合がある、▶素早く避難するためにも住宅の耐震化と家具の固定は重要、という防災上のポイントは、過去の災害の教訓として、これまでも指摘されてきた。

▶2023年には、関東大震災が発生してから100年になったほか、▶能登半島地震と同じ日本海側で発生し、大津波により甚大な被害が出た「日本海中部地震」と「北海道南西沖地震」も発生からそれぞれ40年と30年の節目を迎えた。また、▶2025年には、阪神・淡路大震災の発生から30年となり、▶1925年のラジオ放送の開始から100年となる。

能登半島地震は、こうした災害とメディアの関わりにおいて、大きな節目となる時期に発生した。災害時にメディアは何ができるのか、また自治体や住民とともに、事前に何を準備しておかなければならないのか。今後も調査・研究を進めていきたい。

(なかまる けんいち/なかやま じゅんのすけ)

注:

- 1) 気象庁「『令和6年能登半島地震』における震度について」(2024年1月25日)
https://www.jma.go.jp/jma/press/2401/25b/20240125_sindo_tsuika.html
- 2) 「珠洲市沿岸 津波は地震から1分以内に到達か 専門家分析」[NHK NEWS WEB](2024年1月3日)
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240103/k10014307991000.html>
- 3) 「能登 震度7 被害まとめ(3月1日)」[NHK

- NEWS WEB] (2024年3月1日)
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240301/k10014376301000.html>
- 4) 厚生労働省「新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後の対応について」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/corona5rui.html>
- 5) 内閣府資料「災害関連死について」
<https://www.bousai.go.jp/taisaku/kyuujo/pdf/r01kaigi/siry08.pdf>
- 6) 注3と同じ
- 7) ・上杉慎一「安倍元首相が撃たれた日」『放送研究と調査』2022年11月号
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/domestic/pdf/20221101_8.pdf
・入江さやか「トンガ諸島大規模噴火に伴う『津波警報』を放送はどう伝えたか」『放送研究と調査』2022年4月号
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/domestic/pdf/20220401_8.pdf
- 8) 気象庁「『令和6年能登半島地震』について(第18報)」
<https://www.jma.go.jp/jma/press/2402/16c/kaisetsu202402161400.pdf>
- 9) 熊本地震の「M7.3」は、ここでは震度7を2回目に観測した4月16日の地震を指す。1回目(4月14日)に震度7を観測した地震はM6.5だった。
気象庁「平成28年(2016年)熊本地震 地震の震源及び規模等」
https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/2016_04_14_kumamoto/index.html
- 10) 気象庁「『令和6年度能登半島地震』について(第5報)」
<https://www.jma.go.jp/jma/press/2401/02c/202401021015.html>
- 11) ・気象庁「『令和6年能登半島地震』における気象庁機動調査班(JMA-MOT)による津波に関する現地調査の結果について」
https://www.jma.go.jp/jma/press/2401/26a/20240126jma_mot.html
・「新潟 上越 能登半島地震 津波が高さ最大5.8mまで到達か 気象庁」[NHK NEWS WEB] (2024年1月27日)
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240127/k10014336401000.html>
- 12) 地震調査委員会「石川県能登地方の地震活動の評価」(2023年5月12日)
https://www.static.jishin.go.jp/resource/monthly/2023/2023_ishikawa_1.pdf
- 13) 注12と同じ
- 14) この「流体」について、1月1日、政府の地震調査委員会の平田直委員長は、NHKの取材に対し、「震源の周辺は活火山や沈み込むプレートがないため、地下の深い場所から何らかの液体が上昇してきていると考えている研究者が多い」と答えている。
- 15) 注2の記事も参照。ただし新潟県上越市の津波到達時間については、今村教授への取材による。
- 16) 2024年1月の筆者の取材による。
- 17) 秋田地方気象台「昭和58年(1983年)日本海中部地震」
https://www.jma-net.go.jp/akita/data/saigai/saigai_tyubu.html
- 18) 草野富二雄・横田崇「津波予報業務の変遷」『験震時報』第74巻(2011) p42
<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/kenshin/vol74p035.pdf>
- 19) ・注18と同じ
・このほか、中丸憲一「文研ブログ#494 日本海中部地震から40年 北海道南西沖地震から30年 2つの大津波の教訓」も参照。
<https://www.nhk.or.jp/bunken-blog/500/484734.html>
- 20) 2024年1月の筆者の取材による。
- 21) 「PLUM法」の概要については、気象庁ホームページの「PLUM法について」を参照。
<https://www.data.jma.go.jp/eew/data/nc/plum/index.html>
- 22) 注21と同じ
- 23) 2024年1月の筆者の取材による。
- 24) 「モーメントマグニチュード」については、気象庁ホームページの「地震情報等に用いるマグニチュードについて」を参照。
https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/joho/info_magnitude.html
- 25) 注24と同じ
- 26) 2024年1月の筆者の取材による。
- 27) 「NHKスペシャル 運動企画 見えてきた“河川津波”の脅威 命を守る備えは」

- <https://www3.nhk.or.jp/news/special/shinsai-portal/7/kasentsunami/>
- 28) シリーズ [3.11あれから10年：第11回]「南三陸町、そこで生きる人々の力になるために」[赤十字NEWS オンライン版] 2021年2月号, 日本赤十字社
https://www.jrc.or.jp/about/publication/news/210126_006520.html
- 29) 「『東日本大震災を思い出してください!』その時、ことばで命を守れるか。NHKアナウンサーたちの10年」, note「NHK取材ノート」(2021年7月2日)
https://note.com/nhk_syuzai/n/nadc4f357d7f9
- 30) 注29の「NHK取材ノート」にも掲載されている会議当日の様子。
- 31) 井上裕之「大洗町はなぜ『避難せよ』と呼びかけたのか～東日本大震災で防災行政無線放送に使われた呼びかけ表現の事例報告～」『放送研究と調査』2011年9月号
- 32) 福長秀彦「フォーカス／津波警報・NHKが強い口調で避難呼びかけ」『放送研究と調査』2013年2月号
- 33) 気象庁「平成28年11月22日の福島県沖の地震で発表した津波警報・注意報について」
<https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/tsunami/ihyoka/20161122fukushimaken-oki/index.html>
- 34) 山口勝「フォーカス／4年ぶりの津波警報, NHKが強い口調で避難“呼びかけ”」『放送研究と調査』2017年1月号
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/focus/f20170101_2.html
- 35) 宮古島地方気象台「防災一口メモ」参照
<https://www.data.jma.go.jp/miyako/topix/memo/hitomemo202301.pdf>
- 36) • NHK「サイエンスZERO」取材班+古村孝志・伊藤喜宏・辻健編著『NHKサイエンスZERO 東日本大震災を解き明かす』(2011年, NHK出版) p50
• 加納靖之・杉森玲子・榎原雅治・佐竹健治著『歴史のなかの地震・噴火—過去がしめす未来』(2021年, 東京大学出版会) p21
- 37) 吉澤千和子・中山準之助・河野啓「災害への意識や備えと避難行動～『災害に関する意識調査』から～」『放送研究と調査』2020年4月号
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yonon/pdf/20200401_9.pdf
- 38) • 「『命が助かれば』命令口調の避難呼びかけ, NHK徳永アナら東日本の教訓生かす」産経新聞(2024年1月12日)
<https://www.sankei.com/article/20240112-ADQDFJOSGRLBLMHFNKRXMJSJQA/>
• 「『今すぐ逃げること!』NHKアナが大声で避難呼びかけ…視聴者の『自分は大丈夫』バイアス打ち破る」読売新聞(2024年1月16日)
<https://www.yomiuri.co.jp/national/20240116-OYT1T50105/2/>
- 39) 気象庁「『令和6年能登半島地震』について(第15報)」
<https://www.jma.go.jp/jma/press/2401/29a/202401291400.html>
- 40) 「『動画』阪神・淡路大震災ふまえ 能登半島地震の被災地支援は」[NHK NEWS WEB](2024年1月17日)
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240117/k10014324521000.html>
- 41) 「避難所の女性トイレは男性の3倍必要～命を守る『スフィア基準』」[NHK NEWS WEB](2018年5月1日)
https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/select-news/20180501_01.html
- 42) 北原糸子『震災復興はどう引き継がれたか——関東大震災・昭和三陸津波・東日本大震災』(2023年, 藤原書店) p341
- 43) 中丸憲一「関東大震災100年～地震と台風の『同時・時間差襲来』にどう備えるか～」『放送研究と調査』2023年9月号
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/domestic/pdf/20230901_8.pdf
- 44) 板橋区「令和5年8月28日【全国初】災害関連死亡者0に向け, 区と8県13自治体間で広域避難体制を構築」板橋区ホームページ
<https://www.city.itabashi.tokyo.jp/mayor/snapphoto/1045962/1047887.html>
- 45) 2024年1月の筆者の取材による。
- 46) 「北陸新幹線 全線で運転再開 新幹線の運転見合わせすべて解消」[NHK NEWS WEB](2024年1月2日)
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240102/k10014307061000.html>